



- 永代共養墓について
- ぶつぶん雑記ブログ
- 真言宗について
- 金剛院イベント情報
- 金剛院 建築計画
- しいなまち・みとら
- 唱えてみよう!
- 仏教一年生
- 金剛院NewS
- メールを送る☑
- こんごういんキッズ!
- たいけんしてみよう!
- まんが小僧主くん!
- 金剛院について
- おすすめリンク集
- メディアで紹介
- 東京お寺めぐり
- ぶつぶんクイズ
- 金剛院の四季
- バックナンバー
- ほほほのれび
- ふしぎな密教法具
- 地図・アクセス
- サイトマップ

検索

エッセイ 仏教一年生

- 第37回 [「智の器」としてのお寺の面白さ](#)
- 第36回 [日食メガネと雨男](#)
- 第35回 [東日本大震災一周年に想うこと](#)
- 第34回 [インドマジックで被災地に笑顔を\[2\]](#)
- 第33回 [インドマジックで被災地に笑顔を\[1\]](#)
- 第31回 [井戸の話](#)
- 第30回 [五筆和尚伝説](#)
- 第29回 [縁の下をささえる人々](#)
- 第28回 [日本人、最高!](#)
- 第27回 [人間と占い](#)
- 第26回 [空海さんの謎](#)
- 第25回 [私の知らない私](#)
- 第24回 [記憶と感情](#)
- 第23回 [美人病にかか\(後編\)](#)
- 第22回 [美人病にかか\(前編\)](#)
- 第21回 [四億年の引きこもり](#)
- 第20回 [年齢を隠したがる人たち](#)
- 第19回 [若い時の苦労は買ってでもしろ](#)
- 第18回 [子離れの季節](#)
- 第17回 [35年目の同窓会](#)

仏教一年生

山田真美・著

作家、日印芸術研究所言語センター長の山田真美さんの連載です。

プロフィール紹介

第5回 生きるための勇気



B! 0 チェック いいね! 0 Tweet

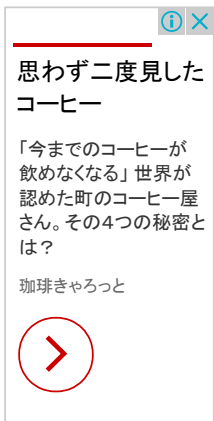
暑かった夏も終わろうとしています。8月は広島・長崎の原爆忌、敗戦記念日、お盆と続き、日本人にとっては1年でいちばん「死」について考える機会の多い月ではないでしょうか。そこで今回は、かつてオーストラリアの田舎町で231人の日本人が命を落とした戦争捕虜脱走事件についてお話したいと思います。

事件が起きたのは、首都キャンベラから車で2時間ほど北上した所にあるカウラという町です。第二次世界大戦中、カウラには連合国の戦争捕虜収容所がありました。円形に近い十二角形をした収容所の敷地は、直角にまじわる2本の道路でA・B・C・Dの4つの区画に分けられていました。

当時、B区には1,104人にのぼる日本人の下士官と兵が、B区の反対側に位置するD区には18人の日本人将校と少数の朝鮮人・台湾人捕虜が、残るA区とC区にはイタリア人の捕虜が収容されていました。

B区で異変が起こったのは、1944年(昭和19年)8月5日深夜2時頃のことです。夜間をふるわせて突如鳴り響いた「デテクルテキハ、ミナミナコロセ」という突撃ラッパの音と、それに続く「バンザイ、バンザイ」の大合唱。日本人捕虜がいっせいに大脱走を決行した瞬間でした。捕虜たちが手にしていた武器は、野球のバットや食事用ナイフなど、

- [第16回 不老不死のお酒](#)
- [第15回 アンチエイジング](#)
- [第14回 女子力不足](#)
- [第13回 仏のレッスン](#)
- [第12回 母と子をつなぐ道](#)
- [第11回 座敷わらし](#)
- [第10回 夢のお告げ](#)
- [第9回 犬に引かれて](#)
- [第8回 生まれ変わり](#)
- [第7回 お葬式の意味](#)
- [第6回 不思議なご縁](#)
- [第5回 生きるための勇氣](#)
- [第4回 祖母の形見](#)
- [第3回 ありがとうの輪](#)
- [第2回 お釈迦さまのお顔](#)
- [第1回 算数と仏教](#)
- [仏教一年生 山田真美・著](#)



戦闘には到底耐えられない物ばかり。当然のことながら、彼らはじきにオーストラリア軍によって制圧されてしまうのですが、この暴動で231人の日本人捕虜と4人のオーストラリア兵が命を落とし、108人の日本人捕虜と4人のオーストラリア兵が負傷。一般的な意味での「脱走」に成功した者はゼロ。これが近代史上最大の捕虜脱走事件である「カウラ事件」の概要です。

ここまでお読みになって、おそらく皆さんは「捕虜たちはなぜ、そんな勝ち目のない脱走を決行したのかしら」と首をかしげていらっしゃることでしょう。彼らが脱走するに至った理由はたいへん複合的なものだったのですが、そのうちの遠因と近因を挙げることはできます。

遠因の最たるものは、事件が起こる約1か月前の7月7日に日本軍がサイパンで玉砕したことでした。当時の戦況は日本軍にとってきわめて劣勢で、サイパンは「ここが落ちたら日本の負けが確定」と言われた最後の砦でした。そのサイパンで日本軍が全滅したというニュースは、当然カウラへも伝わっていました。そのことが捕虜たちを絶望へと駆り立ててしまったのです。

次に、脱走事件の近因として挙げられるのは、事件が起こるわずか半日前にオーストラリア軍から通達されていた「B区の捕虜数が定員の2倍に達し、飽和状態なので、日本人捕虜を下士官と兵の2グループに分けて、そのうちの兵だけをよその収容所に移動する」という決定でした。B区には何かと問題の多い(きわめて軍国主義的な)下士官たちがおり、そうした危険分子から兵を分離させて問題を未然に防ぐことも、移動の大きな目的だったのです。

これに対して日本人捕虜たちは、「下士官と兵は不可分の関係であり、分断など断じて許されない」と激怒してしまいました。これが脱走事件の直接的な原因であると言われています。

しかし、1,104人の日本人を脱走に駆り立てた根本的な理由は、当時の日本人の心を支配していた「生きて虜囚の辱めを受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ」という掟だったと言えるでしょう。

「生きて虜囚の辱めを受けず…」は、1941年(昭和16年)に東條英機が示達した『戦陣訓』の一節です。この言葉の意味するところは、「敵の捕虜になることは非常な恥なので、敵に捕まるぐらいなら自決しなさい(さもないと一族の名を汚すことになる)」。戦後教育を受けた日本人には理解しがたい、なんとも厳しい教えです。

『戦陣訓』は、もとは陸軍兵士のために陸軍省が制定した軍人のための心得でしたが、その後、内閣がわざわざ「(戦陣訓を)国民の心とす

べし」と発表したことから、すべての日本人がこの教えにがんじがらめにされてしまったのです。今でいう「洗脳」の一種ですね。

こうした洗脳教育があったために、敵に捕らえられた日本兵たちは「捕虜」というみずからの立場をひどく恥ずかしいものに思い、(いつかは自分で自分の命を絶たなければ……)と思い詰めてゆきます。その意味で、カウラ事件は「収容所からの脱走」と言うよりも、むしろ「恥からの脱走」であったと言えるのではないのでしょうか。

実は、オーストラリアで拘留されていた捕虜たちは、シベリアなどと違って驚くほど人道的な扱いを受けていました。三度の食事は十分に与えられ、病気になればすぐに病院で治療が受けられ、配給物資も豊富でした。強制労働も課せられず、捕虜たちはありあまった時間を利用して野球や相撲、将棋や俳句などを楽しんでいたそうですから、戦時中であることが信じられない環境ですね。なかには「何もしないで飯ばかり食べていたから、収容所にいるあいだに10キロも太っちゃった」「戦前戦中を通じてカウラ時代がいちばん楽しかった」と言う方もいるほどなのです。

しかし、そんな恵まれた環境に置かれていたにもかかわらず、捕虜たちは「死」を前提とした脱走の道を選んでしまうのです。

脱走するかしないかを決めるにあたって、捕虜たちは全員で投票を行なっています。配られたトイレットペーパーの切れ端に、「○」と書けば脱走賛成、「×」と書けば脱走反対。投票の結果、約8割の捕虜が「○」と答え、これによって全員による脱走が決まったのです。

こう書くと、あたかも脱走が民主主義に基づいて決められたように聞こえますが、実情は違いました。暴動を生き残った元捕虜の方々に戦後何十年も経ってから聞いたところ、「本当は×と書きたかった。でもく貴様それでも軍人か」と言われるのが怖くて、思わず○と書いてしまった」「ほかの人は×と書くだろから、自分ひとりぐらい○を付けても大丈夫だろうと思った」という答えが返ってくるのです。たったひとつしかない命と、その生殺与奪権を人任せにしてしまったわけですね。もしもあのとき、ひとりひとりが勇気を出して自分の心に正直に「×」と書いていたら、231人の日本人と4人のオーストラリア兵が命を落とすことはなかったでしょう。

カウラ事件を通して考えさせられるのは、若い頃に刷り込まれた洗脳教育がいかに根深いものかということです。戦争に負けたことで日本は大きく変わりましたが、「生きて虜囚の辱めを受けず」の教えを信じ

て思春期を過ごした人々の何割かは、戦後何十年と経っても、ついにその価値観を変えることができなかつたのです。カウラ事件を生き残って日本に戻った元捕虜の多くが、かつての捕虜仲間との交流を拒みました。かつて捕虜であった事実を、同僚や近所の人にはもちろんのこと、妻や子どもに対してさえ最後まで隠し通した人も少なくないのです。

私は15年ほど前からカウラ事件を研究しており、これまでに『生きて虜囚の辱めを受けず』（清流出版）と『ロスト・オフィサー』（スパイス）の2冊の関連書籍を出版しました。また2004年にはNHKハイビジョン特集「カウラの大脱走～オーストラリア日本兵 捕虜・60年目の証言」、2008年には日本テレビ「あの日、僕らの命はトイレトペーパーよりも軽かった～カウラ捕虜収容所からの大脱走」の制作にも協力しました。

戦時中とはいえ、時の勢いに流されて「×」の意思表示ができずに死んでいった多くの日本人がいたことは、これからもずっと語り継いでゆかなくてはならないと思っています。それから、事件で亡くなった231人の日本人の墓所を今日まで立派に守りつづけているのが、日本政府ではなく、ほかならぬカウラのボランティアの人々であるという事実も。「命を大切に」と誰もが簡単に言いますが、命を大切にするには、時にたいへんな勇気の要ることです。平和な時代に生きているからこそ、そのことをもう一度しっかりと考えてみたいですね。



生きて虜囚の辱めを受けず
カウラ第十二戦争捕虜収容所からの脱走
ハリー・ゴードン／山田真美＝訳



ロスト・オフィサー
山田真美 著



あの日、僕らの命はトイレトペーパーよりも軽かった
～カウラ捕虜収容所からの大脱走 (DVD)



[番組公式サイト](#)

≪ [第4回 祖母の形見](#) [第6回 不思議なご縁](#) ≫

山田 真美（やまだ・まみ） プロフィール紹介

作家、日印芸術研究所言語センター長。密教学修士(高野山大学)。現在、お茶の水女子大学大学院博士課程後期在学中。

1960年長野市生まれ。明治学院大学卒業後、ニュー・サウス・ウェールズ大学(豪)でマッコウクジラの回遊を研究。その後インド政府の招聘でヒンドゥー神話を調査研究。1996年より6年間ニューデリー在住。

主な著書にダライ・ラマ法王へのインタビューも収録した『死との対話』、ベストセラーとなった『ブースケとパンダの英語でスパイ大作戦』など。

訳書に第二次世界大戦の秘史を扱った『生きて虜囚の辱めを受けず』。

長年にわたりインドを日本に紹介してきた功績を認められ2007年、インド国立文学アカデミーより世界で3人目となるドクター・アーナンダ・クマラスワミ・フェローシップを受ける。

財団法人日印協会理事。日本文化デザインフォーラム、日本蜘蛛学会、宇宙作家クラブ会員。国立天文台広報普及委員会委員。



山田真美 公式ホームページ: <http://www.yamadamami.com/>

好きなこととして飯を食う手順

18186人が読んでいる無料メルマガ。あなたの強みを活かしたビジネスの作り方 personal-promote.comへ進む



[▲このページの先頭へ](#)



© 2002-2016
真言宗豊山派 金剛院

- | | | | | |
|----------------------------|----------------------------|----------------------------|---------------------------|--------------------------|
| 永代供養墓 密厳霊塔 | ぶつぶつ雑記ブログ | 真言宗について | 金剛院イベント情報 | メールを送る |
| しいなまち みとら | 唱えてみよう! | 仏教いちねんせい | 金剛院NewS | おすすめリンク集 |
| こんごういんキッズ | たいけんしてみよう! | まんが 小坊主くん! | 金剛院について | バックナンバー |
| メディアで紹介 | 東京お寺めぐり | ぶつ仏クイズ | 金剛院の四季 | サイトマップ |
| | ぱぱのレシピ | ふしぎな密教法具 | 地図・アクセス | |

起業してはいけない人の特徴

9割のビジネスは創業5年以内に廃業 成功する社長と廃業する社長の違いを公開 directsales.jpへ進む

